

③⑦ 身近な自然を楽しむ 秋のもみじ（紅葉、黄葉）を振り返る

Enjoy the surrounding nature: Look back autumn leaves "maple and yellow leaves"

1/14/2024

吉野輝雄

昨秋に制作し配付すべきアルバムが、私的な都合で年明けになってしまったことをご容赦願います。

晩秋は草木の花よりも、木々の葉が赤、黄色に染まり視界に映るもみじの美しさに圧倒される。芦花公園内と周辺は、まさにそのような景色に変貌した。

公園内には、徳富蘆花が100数年前に入村する以前から存在する粕谷八幡神宮があり、その境内に今は枝を大空に伸ばした赤松、イチョウ(銀杏)、ケヤキ(欒)が威容を放っている。赤松は紅葉にはならないが、赤い木肌が朝日を受けると神々しく思えるような赤色に染まる。銀杏は園内で最も高く、毎年たくさんの実をつける。

もみじは、紅葉と書くことから分かるように秋を彩る代表的な植物と言えよう。日本にはいろはもみじ、おおもみじ、山もみじの3種あり、山もみじは日本海側に多い事、他の2種は太平洋側に多く、葉の周りのギザギザと葉の幅に違いがあるが区別は難しい事をこの度ネット検索しながら学んだ。

カエデ(楓)ともみじはカエデ科で同種(英語ではどちらもMaple)だが、楓は葉の幅はわずかに広く黄色から橙色に変わるので区別できる。

ドウダンツツジ(灯台躑躅)の葉は、橙色から真っ赤に変わる。球形に剪定されると大きな灯に見えるからか、ドウダン=灯台と形容される。アキニレ(秋楡)の深紅の葉に魅せられ、初めて撮った。秋が深まり木々が落葉すると、地面全体が枯れ葉で覆われる。中でもプラタナスの葉は特大で、積もるとじゅうたんのようになる。子どもたちが背中から倒れ、落ち葉に身体が包まれ楽しんでいる様子を見て微笑ましく思った。モミジバフー(紅葉葉楓)の大木が芦花公園にある。特徴は、髪の毛のような棘に囲まれた2cm大の丸い実を落とし、地面が覆われるほどになる事だ。木の真下はボールの上を歩く状態になり転びそうになる。実と枝の間の果柄を胸に付けると、自然が作ったブローチになる。ツタ(蔦)は大木やフェンスを這うように伸び、色づいた姿は秋ならではの景色だ。

最下段は、秋の芦花公園の主舞台(ステージ)：真っ黄色のイチョウ(銀杏)の葉が庭の一角に広がり、黒に近い色の幹と美しいコントラストをつくる。早朝の旭光を受けると扇子形の葉が黄金のように輝く。強風の夜を過ぎた翌朝には、地表の全面を覆い、黄色のジュータンのように見える。一方、蘆花夫妻が眠っている森に目を転じると、何本ものモミジの葉が真っ赤に燃え広がっている。その様は満開の花のようだ。

さらに秋の色を添えるのは、カタルパ保育園近くの道沿いに植えられたお多福南天(背の低いナンテンの栽培種)とカラフルな色の葉を付けたカツラ(桂)だ。桂は、ネット情報によると、白亜紀(約1億5,000万年前)から生き延びる原始的な樹木で、今日では中国と日本にのみ残ると記されている。四季の変化を生き延びた樹木と言える。